

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗 第71回



ヒドウン・カリキュラム (7) 分かった人？「挙手させて指名」

前回までに、子供たちに理解できたかどうか確認する方法として“返事”と“挙手”について考えてきました。今号では、“挙手させて指名”する方法について考えていきましょう。

★挙手させて指名

通常、道場においては、指導者が「分かった人？」と質問し、数名が手を挙げ、その子たちを指名して答えさせていると思います。このやり方を続けていると、あることに気づきます。手を挙げる子たちがいつも同じだということです。

25人くらいのクラスだったら、いつも手を挙げる子は大体3人で、その3人は固定されています。初めのうちは、その3人に順番に指して行きます。4回目の質問で指導者は初めて気づきます。「あれ、いつも同じ3人だぞ。他の人たちは手を挙げないのかな？」となります。

ここで気づいた指導者はまだ救われますが、最悪なのは、気づいているのかいないのか、このいつもの3人にずっと答えさせるといふものです。この3人は、積極的に稽古に参加しており、よく話も聞いていて、理想的な回答をしゃべってくれます。よって指導者にとっては、都合の良い、とても重宝する3人です。学校でも、よく発表し、先生にたくさん指してもらっている子たちです。

しかしながら、これを続けていると、「先生とその3人で勝手にやっていけば！俺たちは関係ないから」「手を挙げなくても大丈夫みたい、ならあの3

人に任せておこう」のように手を挙げない他の子たちは、外野にまわって指導者の話を聞かなくなり、稽古に参加しなくなっていきます。

さらに、私語や手いたずらが増え、指導者は落胆の表情を見せ、しまいには怒鳴りだし、ひどいときは人格否定までします。一方、3人のことについては、いかに素晴らしい模範生か褒め称え、この3人を見習うよう外野の子たちに強制します。ここまできると、学級崩壊ならぬ、道場崩壊です。

★皆さんはいないのと同じです

このような指導者の行為は、次のような誤ったメッセージを子供たちに与えていることとなります。つまり、「先生はこの3人と稽古するので他の人は先生には見えていません。別にいないのと同じなので、他の皆さんは話を聞いていてもいなくてもどちらでもいいですよ」「この3人に答えてもらおうと理想的な回答を言ってくれるので、稽古の進行がスムーズでとてもラクです。だから他の人は発表とか余計なことはしないでいいから、稽古の邪魔だけはしないでね」、と言っているようなものです。

これも、前回までに取り上げましたヒドウン・カリキュラムの例となります。ヒドウン・カリキュラムとは、「こちらが意図していないメッセージを、無意識下で無自覚のうちに相手に伝えてしまうこと」です。この場面でも、指導者はそんなつもりではないのに、意図したものとは異なるメッセージを子供たちに伝えてしまっています。

★ランダムに指名

このように挙手した子の中から指名する方法を、「挙手一指名」方式と言います。野口芳宏先生は著作『授業で鍛える』で、手を挙げた一部の子どもたちだけで授業が進んでいく「挙手一指名」方式を批判されています。

そこで、野口先生は「列指名」方式といって、前から順に一人ずつその列の全員に発言させる方法を紹介されています。私もこの本に出会う前から、「あ行で名前が始まる人全員指名」方式、「小2女子だけ全員指名」方式などをオリジナルで考え、使っていました（今でも使っています）。

道場は学校のように席が決まっておらず、このような方法で対象者をランダムにグループ化することができます。また、少なくとも、その対象者には全員発言するチャンスを与えることができます。私は子どもたちへの説明のあと、突然気まぐれでその日のランダムな指名条件を発表しますので、みんな普段からしっかり話を聞いておかなければなりません。傍観者ではいられなくなるので、良い意味での緊張感を保てます。

「それじゃあ、小学3年男子全員に発表してもらいます！」と御触れを出すと、小3男子のみなさん「えー！」とか言いながらも嬉しそうです。

★自ら考えるチャンスを奪う

指導者が「分かった人！」と質問すると、数名が挙手します。挙手した子はしゃべりたくても我慢して指してもらうのを待っています。すると、挙手

もせず勝手に答えをしゃべりだす子が必ずいます。低学年のクラスに多いですね。積極的で良いことですが、ここでは、喋りたくても我慢するということを教えなくてはなりません。さらに、勝手にしゃべった子の意見をいったん聞いてしまった他の子たちは、ゼロから自分で考えることができず、その意見に大きく影響を受けてしまいます。

ネットの書き込みなども、まず初めに書いた人の論調で、その後の人たちも続いていくことがよくあります。1番初めに書き込みした人が否定的な論調で書くと、2番目、3番目の書き込みも、それに合わせたかのように否定的な論調で続く光景をよく目にします。人は誰かの意見に大きく影響を受けてしまうということです。

「挙手一指名」方式では、このように挙手しない大多数の子どもたちが、自ら考える力を養うことができません。先に述べた弊害も含め、「挙手一指名」方式には多くのマイナス要素があることを指導者は知っておかなければなりません。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館／静岡県沼津市本田町11-12



全国の先生方より、連載の感想をいただいております！

全少、全中入賞者を多数輩出している、神奈川県の超強豪道場「志空会」代表・小林志光先生より、12月号の連載（第68回「時間を守る」）の感想をいただきました。

J Kファンの連載、いつも楽しみにしています。毎回、「目から鱗が落ちる」状態ですが、今月号（2020年12月号）もとても素晴らしい内容でした。以下、自分の経験です。

20年以上も前に初めて道場を開き、指導を始めた頃です。あまり覚えの良くない生徒がいました。稽古が終了し、まだ会場を借りている時間に余裕があったので、その生徒に追加の指導をしました。そうしますと「先生、僕だけ居残り？」と、悲しそうな顔をしました。実は、私はその生徒に少しでも上達して欲しいと「熱血指導」のつもりで居残りさせました。感謝されたとしても、非難されることはないと思っていました。しかし、こちらの意図と考えは一方通行だったのです。その生徒が懲罰的な居残りと感じたとしても、不思議で

はありません。苦い経験でしたが、一つ勉強したように思いました。

連載の後半の「指導者が間違いを認めて謝る」という点ですが、私も子どもたちに説明したり、質問に答えた後で、間違いと分かるとお詫びして訂正をしています。分からないことや不明なことは、「分からないので調べてから答えるね」ともしています。自分的にはプライドがない先生だと思っておりましたが、渡辺先生の「間違いを認めたからといって、指導者の評価は落ちたりしません。『ゴメン、間違えた』と素直に間違いを認める大人に子どもたちはついていくのです」という文章を読んで、十分プライド持って良い行動だと再確認し自信が持てました。「子どもたち」を「保護者」、「弟子でもある」指導者」と言い換えても通用する内容だと思いました。

次号も今から待ち遠しいです。指導にすぐ使える実践的なアイデアなど、いつも参考にさせていただいております。今後共、宜しくお願い致します。

小林先生、ありがとうございました！